平成25年(2013)
阿づまの光
11月号・Nobembro

五代教主作　灰釉茶盌　銘「明日香」（月の輪台萩釉）

題字出口直日

通巻第536号
発行大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL（IP） 050-5510-9502
03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

今月の聖言

耐へしのび勤めはげみて勇ましく
すすむは人の荒魂かも

出口王仁三郎聖師

救いの神業に真心込めて

総務管理課長　藤本　光

十一月の声を聞くと「節分人型おすすめの始まり」、一年の経過の早さをつくづくと感じます。みなさんも、ご自身の人型おすすめ体数は、少なくとも昨年並み、あるいは昨年以上と、目標をお立てになって取り組まれると存じます。

しかし、昨年以上を期しながら現状維持が結構大変です。「大本の人型お祓い、今年もお願いします」と毎年お受けいただいている方の家を訪問して「今回はけっこうです」と簡単に断られることがあります。当然お受けいただけるものと思っていたのが、断られると大きなショックです。その分、毎年新規でお受けいただけるお宅を増やさなければなりません。

この時期、私はお休みをいただいて数日間、亀岡やその周辺をおすすめに回ります。緑豊かな田園風景とはいえ、ほとんどのお宅はインターホンです。家の方が玄関先まで出て来ていただいたらありがたいのですが、インターホンの声だけであっさりと断られます。それが何軒も続きますと、もうあきらめて帰ろうと思います。しかしそうしながらもお受けいただけた時は、これ以上の喜びはありません。それまでの疲れが一瞬のうちに吹っ飛びます。

近年ではこうした足を使ってのおすすめと同時に、手紙によるおすすめもとても有効です。遠隔地に住んでいる方へ、また都合で戸別訪問が難しくなった方へ、東京に来てからの私は、この手紙でのおすすめの方が増えつつあります。

節分までのこの期間、大本信徒のご用はこの人型おすすめ活動が中心になります。おすすめに回らせていただいた日は、肉体的にも、精神的にもしんどさを覚えるものですが、結果はともかく不思議と自分自身が元気になります。明らかに神さまからご守護をいただいていると感じています。

大難を小難に、小難を無難に、世界中にわだかまる邪気を祓い清め、すべてのものの平安と幸福を願い、荒魂の勇を発揮しつつ、一人でも多く、一体でも多くおすすめできるよう、共々に人型のご用にお仕えさせていただきたいと存じます。

第125回大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」

神と人

―人は神の子、神の宮―

講師 森（もり） 良秀（よしひで）
（東京宣教センター次長・当時）

不思議な人体

この夏は、東京も梅雨明けと共に厳しい暑さが続きました。これだけ暑い日が続きますと、ビールの消費は上がるし、アイスクリームもよく売れたことでしょう。皆さんも水分をしっかり、お取りになったと思います。

人間の体は不思議ですね。このように水分をとりますと、必要な養分は体内に取り込んで、それ以外は排泄されます。ご存知のように腎臓という臓器は、血液の中の水分を取り、その水分は尿管を通して膀胱に運ばれます。膀胱である程度溜まりますと、今度は尿道を通って外に排泄されます。

普段は当たり前のように思っていますが、この体の働きは実に不思議です。もし、そのうちの一つにでも故障が起きれば、大変なことになります。

この不思議な働き機能を、〈誰が〉そのようにしたのかを考えた時、本日の主題である〝神さまの実在〟を無視するわけにはいかなくなります。

これは、人間だけではなく、動植物、また細菌にいたるまで、この霊妙な生命の営みの中で、このような働きがなされているということは、大変不思議です。

神の実在

「神がいたら自分の目の前に見せてくれ」という方がいますが、神は見えないことが尊いことであり、見えないことが有難いことなのです。

神という言葉は今から一三〇〇年前、日本で最も古い歴史書『古事記』の最初に「天地の初発になりませる神は、隠身（かくりみ）なり」として出てきます。ここの〈隠身（かくりみ）〉の最初と最後の文字をつないで、〈かみ〉となったと言われています。

そもそも私たちの回りには、物質的な扱いの出来るものと、非物質的の二つがあります。見えない世界も一つの世界なのです。

ただ、目で見えないから無いとは言い切れません。肉眼で見ることができなくても、顕微鏡や望遠鏡を覗くと見えてくる世界もあります。また肉体の耳に聞こえない音もたくさんあります。地球が自転する音は大きすぎて聞こえないですし、聴診器を当てても聞こえない小さな音もあります。これらは物質の世界です。

築地本願寺（都内）の入口に大きな掲示板があります。そこには、ある詩人の詠んだ詩が書かれています。「昼にお星は目に見えぬ。見えぬけれどもあるんだよ。見えないものでもあるんだよ」。大変興味深い詩です。

神さまは目に見えないからと言って、いらっしゃらないわけではありません。見えなくても、私たちはいろいろな場面で感じることはできるのです。

神さまは、この宇宙を意識的に統一されている存在です。決して、偶然に出来上がったものではありません。時計を見ておりますと自然に動いているようですが、そのように人間がつくり、動かしているわけです。秒針、長針、短針、文字盤と、それぞれ役目、役割があります。

同じように人間も、その人に応じた働きをして、神さまから与えられた使命を果たしていくことが大切です。その日常生活の中に、神さまの存在を感じることが出来ます。

例えば、指先をちょっと傷つけた時、出血した部分を思わず口に当てます。しばらくすると血が止まり、そのうち血の塊でかさぶたができます。更に、数日が経過すると、かさぶたが取れて元の皮膚に戻っています。

これは、自分が計画を立て、コントロール出来るものではありません。私たちはどうも別の意志によって生かされているのだな、ということが言えると思います。

また、人間の生命維持装置である心臓は、一瞬たりとも休まないで動いています。心臓は、全身に新鮮な酸素と栄養分を含んだ血液を送り届け、末端の汚れた血を戻すという循環機能をつかさどっています。

これも自分の意志でしなくてはいけないとなったら、大変なことです。このように私たちは自分の意志以外の支配、統制によって、生かされているということを理解する必要があります。

神の概念

一般に神さまと言いましても、日本人や西洋人また各民族によって捉え方が違います。ユダヤ教やキリスト教、イスラムは、宇宙根源の神を信仰する一神教ですし、神道は多くの神々の存在を認める多神教です。そして仏教は、木の葉や石ころにも仏性が宿るという汎神教です。

では大本の神さまの概念はと申しますと、『一神即多神即汎神』です。このことを端的に示したのが『宇宙の本源は活動力にしてすなわち神なり。万有は活動力の発現にしてすなわち神の断片なり』という教えです。前半の「…すなわち神なり」までは、一神教的要素を含んでいます。後半の「万有は…」以下の部分は、多神教であるとともに汎神教的要素が示されています。

天地創造の折、天之御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神の造化三神が出てこられます。主神である天之御中主神は、静的状態の一柱ですが、いよいよ動的状態である活動期に入られると二柱の御神名に変わります。

大相撲の中継を見ておりますと、『横綱白鵬、下手を取りました。上手はまだ取れません』というアナウンスが聞こえてきます。横綱を天之御中主神とすると、上手（左手）とか下手（右手）にあたるのが高皇産霊神、神皇産霊神となります。

天之御中主神さまは、静的状態の白鵬であるけれど、横綱がいざ「はっけよい　のこった」と相撲を取りだしたら、白鵬の左手は高皇産霊神、右手は神皇産霊神に相応するわけです。

ここで大切なことは、神さまの活動が始まる時には、一つの決まりがあります。それは、〈霊主体従〉〈進左退右〉です。秩序を維持す

るために、この法則は未来永劫変わることはありません。

例えば、祭式の作法でいうと神さまの前では、必ず神さまに向かって、左足から先に出ることになっています。

これは、人間の〈心と肉体〉との関係も一緒です。〝京都に行こう〟と心が思えば、その後実際に、京都に行くという肉体の行動に移る。〝悲しい〟気持ちが起こると、肉体に涙という形で出てくる。ビックリすると心臓の鼓動が高鳴る。何事も霊から始まり、体に移ります。逆は有り得ません。これを『霊主体従』と言います。

この法則によって、宇宙は修理固成、生成化育されて今日に至っています。

三大学則

神は霊力体の三つの要素から成り立っており、その解説をしたものが『大本三大学則』で、神さまの実在の証しを立てる教えと言えます。

一、天地の真象を観察して、真神の体を思考すべし

天地のありのままの姿を鳥瞰的（ちょうかんてき）に、また虫の目のように這いつくばって見ていくと、真の神さまのお体の不思議さ、有難さが分かってきます。

神さまのお身体は、極大の世界を言うと、私たちの住んでいる太陽系宇宙をも越える無限絶対の世界です。日本が誇るすばる望遠鏡は、宇宙の最遠の天体が百二十八億光年の彼方にあることを発見したそうです。見当の取れない遠い距離ですが、宇宙の果てはまだその先です。

一方、極微の世界では、一握りのお土の中に、何億もの微生物がいるそうです。そのお蔭で土地が肥え、食べ物が育ち人間をはじめ動植物が生きていけるのです。今までは自然と共生しましょうと言われてきましたが、これからは宇宙とも共生しましょうという意識をもって生活することで、神さまの存在を理解する上で大切なことだと思います。

二、万有の運化の毫差なきを視て、真神の力を思考すべし

すべてのものは、大は天体の動きから、小は原子の動きに至るまで、極めて正確に一定の法則と軌道を持って巡っています。

春夏秋冬の四季や、朝昼晩の一日のめぐり移りは、私たちは当たり前のように思っていますが、とても大切なことです。また、地球上の水の循環もそうです。家の屋根や道路に降った雨水や海水は、蒸発して雲になり、雨や雪となって地上に落ちてくるのを繰り返します。この運化の働きが止まってしまうと、地球上は水びたしになるか、乾燥地帯で何も育たないようになってしまうかのどちらかです。

この微妙なバランスと、狂わない巡り移りこそ、神さまのお力の顕現であり、そのもとに私たちは生かされています。

三、活物の心性を覚悟して、真神の霊魂を思考すべし

活物とは、動物と植物、そして鉱物も含めて指します。

嘘発見器を使ってアメリカのある学者が、大変ユニークな実験結果を残しています。それは、ゴムの葉に嘘発見器の電極の端子を付けて、タバコの火をゴムの葉につけました。すると電極の針が強く振れました。次にゴムの木の前に、煮えたぎったお湯の入ったフラスコを置いて、金魚をその中に入れました。当然死んでしまいます。異種の活物であるのにゴムの葉につけた針は大きく揺れました。更に実験では〝このゴムの葉を燃やしてしまおう〟と本気で思い、強い想念を葉へ向けました。もちろん実際には燃やしませんが、それでも針は激しく震えたというのです。

この事例からも分かるように、植物にも神さまから与えられた心性が宿っており、それ故に生きる命を大事にしているのです。

神と人の関係

神さまのご神格は『愛』と『信』です。『愛』には善と悪があります。愛善は、神さまから出ている愛で、見返りのない愛のことです。反対に愛悪というのは、自然界における愛で、見返りを求める利己的な愛です。

もう一つの『信』には真と偽があります。信真とは、神の存在を信じ、神の子たる本分を尽くして、死後の生涯を信じることです。逆に、内心に悪を包蔵しながら、表面的には神さまを信じ、礼拝をしているのが虚偽です。

神格は、神の子である人の内面に流れてきて、人格を構成すると言われています。私たちは時々、「あの人は人格者だ」という言い方をします。

愛善とは熱であり、暖かいのです。あの人は「心が暖かい人だなあ」。逆に「なんて心の冷たい人だ」と言ったりします。心が冷たいのは利己的愛です。

また「あの人はものに明るい人だ」「ものに暗い人だ」と言ったりします。信真は神的光を指します。光は明るく輝いています。その人の人格は、まさに神格に満たされていると言えます。

大本では神と人の関係を『大本教旨』として示しています。『神は万物普遍の霊にして人は天地経綸の主体なり、神人合一して茲に無限の権力を発揮す』

神は、万物にあまねく偏在する霊を与えられた存在であるという意味です。一方、人は天地を治め整えていく使命がある。ですから、世の中が栄えて発展するのも、崩壊していくのも人間の心次第だと教えられています。

人間が万物の霊長と言われる所以は、人以外の被造物を支配する権能を神さまから与えられているからです。

神人合一は、神さまの御心を心として、神徳を豊かに受けて最善を尽くすことで可能となります。お寺に行くと、境内に大きな釣鐘がありますね。釣鐘の鐘と、鐘を突く撞木（しゅもく）の関係が、神と人の関係に似ています。撞木で鐘を突くとゴーンと音が鳴ります。この音は鐘から出た音でも撞木から出た音でもなく、二つが合わさったことで出た音です。そしてこの音こそが権力、また神徳が発揮された状態です。

神ばかりでも、人だけでもこの世の中は動いて行かないのです。大本では人間が何もしなくても、神さまがやってくれるというような教えではありません。この現界では、あくまでも人の力が必要です。

大本の人間観

『人間こそこの地上における生きた神さまである』。これは大本の人間観の特徴と言えます。

人間とは、人と畜生の間という意味もあります。人間は神性と獣性の二つの心を持ち合わせています。それゆえの葛藤が人生には多くあります。ですが、元々は神性ですから、これを開発し伸ばして、獣性を出来るだけ抑えていくことが大切です。

私たちは神の広大無辺な存在をしっかりと理解し、その上で人としての使命を果たさなければなりません。

東光苑月次祭

東光苑月次祭は十月十三日、午前十時三十分から、斎主・和田桂一祭務課長のもと執行され、三百五十人が参拝した。

祭員は関東教区各主会直心会員、少年祭員は山梨主会の小池翔音さん、礼音さん兄妹、伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐藤暉枝直心会栃木連合会長、添釜は宇野社中の皆さんがそれぞれ担当した。

祭典後、東京本部を代表して浅田秋彦東京宣教センター長があいさつにたち、去る十月六日、千葉県九十九里浜で千葉主会主催による「東日本大震災犠牲者合同慰霊祭」が執行されたことや、十月十二日から十五日の三日間、タワーホール船堀（東京都江戸川区）を会場に「第百回日本エスペラント大会」が開催され、東京本部にも国内外のエスペランチストが来苑することなどを紹介。東京本部で開催しているエスペラント講習会への参加を呼びかけた。

続いて人事異動報告（下記参照）があり、その後『幸せ』を分かちあうために（福祉活動）」をテーマに、浅田センター長が月次祭講話を行った。

次いで奉納行事が行われ、関東教区青松会の代表が『霊界物語』の役割拝読を奉納した。

清々しく祭典にお仕えされた直心会員と少年部員の皆さん

青松会有志による「霊界物語」役割拝読の奉納が行われた

●**離任あいさつ** 加藤道明（祭務課主任）

梅松苑・祭祀課へ配属されました。平成二十年に東京本部に着任して以来、皆さまから温かいご指導をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

●**離任あいさつ** 成尾義（愛善宣教課主幹）

このたび祭務部祭祀課（長生殿受付）へ異動することとなりました。東京本部在任中の五年間、皆々さまよりたくさんのご高誼を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。

●**着任あいさつ** 高野春樹（祭務課主幹）

初めまして。綾部祭祀課から異動し着任しました高野春樹と申します。出身は富山市です。首都圏でのご神業を担うという光栄に感謝しつつ日々を励みたく存じます。

●**着任あいさつ** 鈴木林太郎（愛善宣教課主事）

教主さまのご教導を仰ぎ、皆さまに清々しく東京本部へご参拝いただけますよう真心を込めてご奉仕させていただきます。ご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

出口なお・王仁三郎の世界を語る 2013

第百二十八回大本公開講座『出口なお・王仁三郎の世界を語る２０１３』は、十月十六日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において開催され、猪子恒東京宣教センター次長が「普遍の真理『四大主義』～宇宙の呼吸・宇宙のリズム～」と題して講演を行った。参加者は十八人（内、一般四人）。

講座では、昨今の自然災害や政治・経済、個人の生活環境など多岐にわたる実例をあげながら、本来目指すべき調和が四大主義に示されていると説き、その中心が宇宙の本源、活動力であり神であると解説。「出口なお開祖のお筆先（『大本神諭』）に繰り返し示される身魂磨きと立替え立直しが、四大主義の清潔・楽天・進展・統一の実践に通じ、天命を自覚し、互いに好意をもって共存する精神を育むことが、平和な世の中の到来を招くであろう」と結んだ。

東光苑祭典・行事予定

11月

3日（日）午前10時30分執行
開教百二十一年大本開祖大祭遥拝祭

10日（日）午前10時30分執行
東光苑秋季大祭・新穀感謝祭
七五三詣り

16日（土）午前10時00分受付
東光苑「葬祭研修会」

20日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題 人は何のために生きるのか
～万物に使命がある～
講師 浅田秋彦（東京宣教センター長）

23日（土・祝）
全国人型おすすめ活動の日

12月

8日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（月）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（177年）

18日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題 泥田に咲く蓮の花に学ぶ
～苦しみが救いを生む～
講師 春風ふくた（漫才師）

22日（日）
全国人型おすすめ活動の日

25日（水）午前10時30分執行
出口日出麿尊師毎年祭（22年）